

上智大学学生通信

第22号

2003年7月11日
発行人 風間春香
井上彩子
濱野さゆり
原島麻希子

学生通信

先生インタビュ

近藤先生編

今回は大きなテーマとして「英語を学ぶとは？」についてインタビューしました。

最近第三次英語ブームと
言われていますが、どうして
そう言われているのでし
ょうか。

ネットの普及があると思
います。インターネットで相
当な情報が得られますが、
そのほとんどに英語が使わ
れています。もう一つは政
治的なもの、経済的なもの
ですが、冷戦崩壊後世界に
おけるアメリカの力がより
強くなったことによりアメ
リカの母国語である英語が
普及している事実があると思
います。」

英語を学ぶ意義とはどんな
ことですか。

「日本人のように英
語を第二外国語として学ぶ
人口が世界で増えてきまし
た。英語圏以外の人達とも
英語でコミュニケーション
ができるということは非常
に大切だと思つてますよ。私
達の視点をより大きく広
げてくれます。」

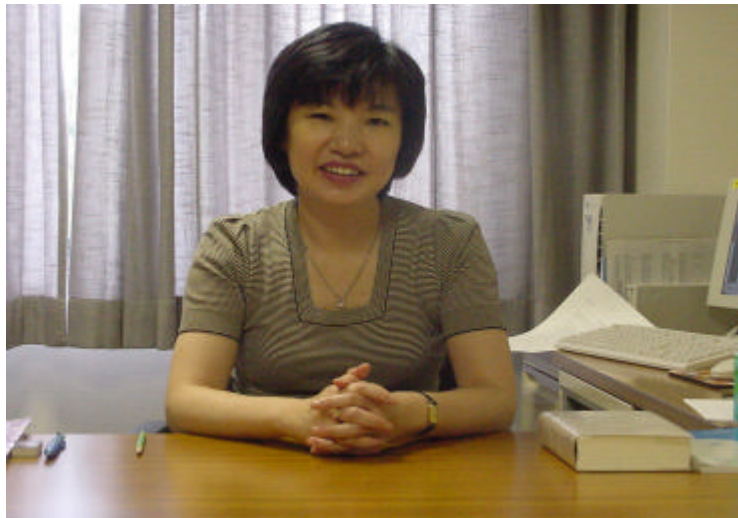
そのコミュニケーション
というのは「会話」という
意味ですか。

「会話だけができれ
ばいいと思つている人もい
るかもしれないですが、会
話といった時に何をイメー
ジするかが問題なのです。
ただあいさつをして表面的
なことだけを言えばそれで
いいのでしょうか。でも
私は考えていることや意見
それから文化や国といった
かなり深いところまで相手
に伝えることができて初め
てコミュニケーションと言
えると思います。ですから
そういったコミュニケーション

ヨンができるようになるた
めには、文法力、語彙力、
読解力や背景知識といった
総合的な力が必要です。」

一般的に日本人は中学、

「期間で考えると
長いように聞こえるかもし
れませんが、実は英語に接
している量というのは少な
いのです。もっと多くのも



高校、そして大学で何年も
英語を学んでいるにもかか
わらず、英語ができないと
言われていますよね。

のを読んで、聞いて、長い
間接しなければ英語は身
につきません。日本人が英語
ができないというのは、や
っているのにできないとい

うわけじゃないと思います。
英語の基礎的な訓練の中で
自分でしっかりと積み上げ
なければいけない部分をや
っていないからだと思います。
受験英語も決して無駄
ではないです。文法的な力
や読解力もつきます。ただ
それだけで終わるのではな
くて、それを使う機会を設
けることが大事なんです。
たとえば自分の思っている
ことを書いたり、ディスカ
ッションなどで自分の意見
を発表する訓練はあまりや
つてこないと思います。だ
から受験で勉強したこと
の上に新たに力をつけてい
くことが必要です。」

日本で勉強するよりも外
国に行った方が英語の能力
をのばすことができますか。

「英語圏に住めば英
語の実力が伸びるという考
え方は違うと思います。外
国に住み始めるとまずカル
チャーショックを受けます。
心理的な壁と言葉の壁があ
りますね。そこでそれを乗
り越えようとする積極的な
気持ちがないと、ついつい
楽なほうに流れていってし
まい、日本人と行動するパ
ターンに陥ってしまいます。
そうなると同年間住んでも
なかなか力がつかないとい
う可能性は十分にあります。
そういう人達が多いの

は事実です。ですがその反
面、状況と英語がセットに
なって分かることというの
があります。そういった日
本にいたのではなかなか身
につかない力をつけること
ができます。それから異文
化体験を通して、違った価
値観を知ることができます。
帰国後も自分の周りのいろ
いろな価値観をより理解す
ることができるようになる
でしょう。そのためにはや
はり積極的に人と関わら
るをもって、自分の壁を乗り
越えようとする覚悟と努力
が必要だと思います。」

先生ご自身も高校生の頃
に留学した経験があるそう
ですね。

「アメリカのカリフ
オルニア州に2年という異
文化交流を目的としたプロ
グラムで交換留学をしまし
た。一年間ホームステイを
してアメリカの家庭ではど
んなことが行われているの
かを体験し、アメリカの普
通の高校に通い、周りと同
じように授業を取って勉強
しました。すべてのことが
思い出深く、いろいろな体
験をしましたね。フットボ
ール、ダンスパーティーな
どすべての行事に参加しク
ラブ活動もしました。アメ
リカの人達だけでなく世界
中から来ている留学生と交

海外の大学に行かないで
も英語力を身に付けるため
にはなにをしたらいいで
すか。

「この短大は環境的
にとっても恵まれていると思
います。先程も言つた英語
の基礎力をつける授業がた
くさんあります。自分の持
っている英語力を試し、意
見などを発信する機会もあ
ります。ですから授業を十
分に活用していれば海外の
大学で勉強しているのと、
そう変わらない環境だと思
います。外に一步出れば英
語を話す環境ではないとい
う点では違いますが、学校
で勉強していることは、そ
う大きく変わるものではな
いんです。」

具体的に勉強の仕方に関
してのアドバイスはありま
すか。

「皆さんの中には話
せるようになりたいという
願望がずいぶんあるよう
ですね。それならば、まずた

くさん読んで聞くことが大切です。話す機会を持ちたい時は話す相手を見つけても、自分の頭の中で身の回りに起こっていることを描写してみたり、考えていることを英語で言ったりしている、いざ本場に話そうとするときに表現がすぐ出てくるようになります。日本にいるならばそういう工夫も必要です。」

では次に先生の学生時代について聞いてみたいと思います。先生は上智大学の学生だったんですね。一番思い出に残っていることはどんなことですか。

「ESSというクラブに属してディベートをやっていたことです。かなりの力を入れてやっていたので、活動は毎日あって、長期の休みの日にもずっと話すテーマについて調べたり、土日には他大学との試合をしたりしていました。ディベートは一時間くらいの時間の中で、スピーチを繰り返して、その後質問と反駁をします。二人制ディベートと五人制ディベートがありますが、私は二人制の方でした。テーマはほとんどが経済問題や政治問題が多く、その題について肯定と否定に分かれて討論します。三年生の時に上智林という全

国大会で優勝しました。テーマは、日本は東南アジア諸国からもっと工業製品を輸入するべきか。でした。それから四年生の時に日米の交換ディベートに参加してアメリカに行きました。これはアメリカの学生とディベートをして回るツアーです。これもまた私にとっ

ては大きな経験です。」

以前、先生が通訳のアルバイトをしたことがあると聞いたのですが、そのことについて詳しく教えてください。

学校でできたのは非常にいい経験でした。直接話をしたわけではありませんが、その姿は堂々としているように見えました。また、サッチャー首相のように女性が世界を引く張っていく時代が来たんだな、と実感しました。」

「大学時代は英文学科で学んでいました。本当のことを言うと英語学科を志望していません。当時は通訳になりたかったのですが、それには英語学科で勉強するほうがいいのではないかと考えていたからです。ですが英文学科にまったく興味

がなくて、それで受かったのが英文学科だったというわけです。ですが英文学科の授業はおもしろく、今の上智大学の学長でもあるキャリア先生のゼミも取りました。卒業論文はマーク・トウェインで書きました。上智大学という場所から得たものは大きかったです。たとえば私は宗教学に興味を持っていました。その授業をたくさん取りました。キリスト教に信仰という意

味で出会ったのもこの頃です。ESSのアドバイザーにハウエル先生という神父様がいらして、先生にお願いして週一回キリスト教のカトリックの教義について教えていただいています。」

「自分の家庭では父親と祖父が教師をしていました。私は反発精神というか、自分の道を歩きたいという気持ちがありました。なんとかして教師にならずにすむ方法はないかと真剣に考えていました。大

学時代は通訳志望で、卒業後は外資系の銀行に勤めました。その後専業主婦になったので、子育てを中心にしている仕事として英会話学校で教えていました。そして教えることをライフワークにしたいと思うようになったことが、大学院に行こうと決めたくっかけです。三十六歳のときに上智大学の大学院外国語学研究言語学専攻で勉強を始めました。言語教育に直接つながる学問を学びたいと思ったので、言語学の中での応用言語学という言語習得を扱った学問を学びました。そしていまに至っています。」

「家族はもちろん主婦をやっていたけれど、あなたがいたいと思っただけで、私の意志が非常に強いということもあって、そのがんばっている姿を見ているうちにサポートしてくれるようになっていました。私がこうやって家事をしながら、仕事をやる生活を送るのは家族のおかげです。また家族がいるということが励みになっていきます。」

先生とご主人と息子さん二人の四大家族なんですよ。家での共通語は英語ですか。

「うちは絶対そういうことはないです(笑)。子供達が小さい時に特に英語を教えるという事もやらなかったです。英語の絵本を読んだり、ビデオと一緒に見ることは、楽しむという意味ではありましたが、子供達が物心ついて、日本にいるのに何で英語をしゃべるの?という強い気持ち芽生えてきてからはそういうことはしなくなりました。でも今になって、なぜか一人

とも英語は得意な方なので不思議です。しかし私もユースや映画を英語で見ているので、知らず知らずのうちに触れている環境はあったと思います。あと英語に関する本が置かれていることで、それを取って読んであげたいけれど、そこにあるという存在が影響を与えたのかもかもしれません。」

最近一番関心のある事について教えてください。

「今の楽しみというのは、四人で議論することです。うちの家族はみんな議論好きで、テレビなんかでちょっと時事問題が出た時に、みんなで自分の意見を言い合います。イラク戦争の問題は、なぜ戦争をしなければならなかったのかという事を考えるのをやめてはいけないと思います。報道ではまるでフィクションの映画やゲームのように空爆されているシーンが流されました。しかし爆弾が落ちてくる先に傷ついている人がいるという現実を、私達の傷みとして感じなければならぬと思います。」

「まず、夢を持ってほしいということです。それを実現するために短期目標を決めて、着実にやっていく姿勢が大切だと思います。今の時点で将来何をしたら良いのか分からなくても、これからの長い一生の中で本当にやりたいことが見つかるかもしれません。しかしそれを見つけないためには、今できる最大限の努力を積み重ねていく事が結びついていくと思います。私自身は大きな夢として、世界の平和につながるようなことをしたいです。今やっていることがそれにつながるような姿勢でやっていきたいです。」

お忙しいところ、快くインタビューに応じてくださってありがとうございます。先生のお話は大変勉強になりました。

私はインタビュ後に、長い間英語に携わってきた経験はすべて先生自身の糧になっていくんだな、と感じました。英語を学ぼうと努力することに無駄なことはありません。つまり積極的に英語に触れようとする意欲こそが上達する秘訣ではないでしょうか。